



赤水図（改正日本輿地路程全図）の復刻を比較しよう！！

高萩・赤水を愛する皆様へ

10万円で

スポンサー企業名の掲載権

こちらに企業名を記載させていただきます。



長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」（高萩市教育委員会提供）

JR高萩駅前にある長久保赤水像



でも1779年に初版が完成した「改正日本輿地路程全図」（通称・赤水図）は実用性が高く、江戸時代の庶民に広く流通した。幕末の志士を育んだ吉田松陰（1830～59年）が兄に宛てた手紙には「これが無くしては不自由」と、赤水図を旅に役立っていたことが記されている。

伊能忠敬だけじゃない

江戸時代の地理学者・長久保赤水

日本地図の先駆者、功績評価

茨城県高萩市出身で江戸時代の地理学者、長久保赤水（1717～1801年）が近年、知名度を上げて文学、地理学を学んだ。30代半ばで初めて実測で日本地図を作った伊能忠敬より42年早く、情報収集による精度の高い「赤水図」を作り、庶民や後世の知識人に広めた功績が評価され始めた。

赤水は高萩市赤浜の農家生まれで、幼い頃に両親をなくした。親族で、幼い頃に両親をなくした。親族で、比較的正確なのが特徴。中と強調する。

赤水の地図は天文学を取り入れた旅人にもお茶をこちそうして話を聞くなど、情報収集能力にたけていた。1821年に完成した伊能忠敬の地図は、伊能自らが実際に各地を歩き歩幅で測量したことで有名。一方で赤水は、自分で集めた地名などの情報を地図に盛り込んだため、内陸の佐川春久会長（70）は「友人が多く、旅人にもお茶をこちそうして話を聞くなど、情報収集能力にたけていた」と強調する。

赤水の関連資料693点は、2017年に県指定有形文化財になるなど徐々に価値を評価され、国の文化審議会は今年3月、同資料を国の重要文化財に指定するよう文部科学相に答申した。

さらに知名度を上げようと顕彰会は同月、赤水が地図に書き残した不思議な海上現象を元にした絵本「りゅうのひかり」を出版。縦約84センチ、横約128センチの赤水図のレプリカ発行を目指し、資金300万円をクラウドファンディングで募る。

佐川さんは「世界で通用する、誇れる先人の一人。地理の歴史の中に赤水図をしっかりと位置付けたい」と語り、将来的には大河ドラマ化も目指している。

赤水の手紙

（長男・藤八郎へ）
赤水書簡集現代語訳から抜粋

（前略）心の目の付け所が肝要なのである。すべからず書を読む時には、難しく疑念が生じたところは不審帳へ書き出して置いて、その次のところを順々に読むのが良い。読んだ書物が多くなれば、後には前の疑問に思ったところも自然と理解できるようになるものである。これを大成の日という。常日頃から読書を怠らなければ年が経つにつれて大成するものである。（略）大金を貯えもつことは大悪のもとになると思う。金が貯まったならば時々人に施してやるのが上策である。



20年以上かけ作成

地図への情熱

先駆者

長久保赤水「重文指定」

上

江戸時代の民の生活を支えた「バスター」。「高萩市出身で江戸時代の学者、長久保赤水（1717～1801年）は1779年、日本地図「改正日本輿地路程全図（赤水図）」を完成させた。国の文化審議会は3月19日、赤水の関係資料（同市歴史民俗資料館保管）を国指定の重要文化財（美術工芸品）に指定するよう萩生田光一文科科学相に答申。赤水に魅了され、顕彰活動を続ける関係者に話を聞きながら、赤水の業績と人物像に迫った。

▽伊能図より前

地図作成で著名な伊能忠敬に上る「伊能図」よりも42年早く、赤水は地図作成の通に旅にと民に愛用された。先駆者と言える。



長久保赤水の自画像（高萩市教育委員会提供）

高い実用性、広く普及



赤水が地図を学び始めたのは35歳の頃。先人による地図や地誌、官製の国絵図など多くの資料を基に編集。自身の実体験や多くの旅人・知人からの話も参考に、20年以上の歳月をかけ赤水図を作成した。赤水図は129万6千分の縮図で、10里（約40km）が1寸（約3cm）。大きさは縦84・6寸・横128・8寸。国境や関所、城下町、名所など10種類の記号が使われている。日本地図としては初めて経緯線を用いられ、方角が正確に分かる。天文学の知識を取り入れた点も画期的だとされる。赤水は初版発行後も情報収集と改訂を熱心に続けた。1791年発行の第2版では、初版で4200カ所だった地名が2万9千カ所に増え、面積は9倍と増えた。

▽面積は9倍

三浦さんは昨年、赤水図を3倍に拡大した地図を印刷会社に個人で発注して作り、同様に寄贈した。縦2153寸、横3186寸となり、面積は9倍と増えた。

赤水図は宿場のある地名や地形などが細かく記載されており、原寸では見づらいのが難点だった。三浦さんは「3倍にしたことで文字が読みやすくなった。例えば自分の出身地の地名などを見られるので、赤水図に興味を持ってもらうことに役立った」と目を細める。3年前までは赤水について「ちらっと知っている程度だった」と三浦さん。深く知るうち、業績や育った環境に面白みを感じた。

赤水は幼くして家族を次々に亡くした。だが「継母は農民だから教育はいらない」との方針ではなく、本を読ませ、医者の私塾に通わせた。良い教育によって赤水という名の「ロケット」がドンと打ち上がった。三浦さんは赤水の生涯をこう表現する。

赤水の手紙

（長男・藤八郎へ）
續長久保赤水書簡集現代語訳から抜粋

（前略）必ず必ず村役人などへ申し出て訴訟などにかかわり合うのは以ての外である。ご公儀の権力を借りて貧しい人から益（金）を取ることは、棄てるよりはるかに劣るということを心得るべきである。（略）第一に子孫は誰によらず村役人などになりたいと思ふ心、或いは金儲けしたいという考え、こういうことが平常心の中に生じないよう教育しなさい。ただ農業にのみ励み、質素儉約を旨とし、余暇には学文（学問）に精進し楽しむことばかり心がけることが良いのである。

赤水の手紙

（孫の作之丞【藤八郎の長男】、次男・四郎次、三男・大塚文右衛門へ）
續長久保赤水書簡集現代語訳から抜粋

（前略）私が若い時に借りて、田舎へ出る時にも懐へ入れて学問に励んだ。さて、学者も普通の人である。善人を知って、師として友として交際すれば、日々月々に利益がある。悪い人を近づければ、日々利を失う。（略）私心なく公正に行動する人を君子という。私心がないというものは、自分の心におこる欲望を捨てて仁義の道に随って行動することである。公正とは正直誠実な心を持つ人を愛する事、他人とも親しみ合い、嘘、いつわりを言ひ、不正の道を歩み、不孝不義の怠け者、酒・女・博奕を好む者は我が子、兄弟、そのほか親類といえども遠ざけて親し

6ブレーク!

JR高萩駅前に、2012年11月に建てられた長久保赤水（1717～1801）の銅像があり、駅前のランドマークとして乗降客に親しまれています。そこで聞いてみました。赤水さんって何者、と。

「江戸時代中期の儒学者で、日本地図をつくったといわれる人なんです」

板倉青波さん（16）の答えは明快。それぐらい赤水さんは人々にすっかり定着しています。なので、「そのような人が高萩にいたことは誇りです」と及川賢信さん（15）がやや自慢げに答えるのも当然です。

じつさい赤水さんは農民出身ながら学者に転じ、緯線と方角線が入った日本地図を初めて刊行するという大事業を成し遂げ、一気にブレークする人でした。

数え52歳に達した赤水さん、まず「改製日本分里図」を完成させます。

この地図がいわゆる赤

大ベストセラーついに完成



「改正日本輿地路程全図」(2版)の常陸国部分。地名がびっしり＝高萩市歴史民俗資料館蔵

水図（改正日本輿地路程全図）の元になる原図です。この後、修正を加えてより信頼性の高いものになってゆくんですが、この原図の完成まで実に約20年も費やしているんです。赤水さんって何者、と。

「江戸時代中期の儒学者で、日本地図をつくったといわれる人なんです」

板倉青波さん（16）の答えは明快。それぐらい赤水さんは人々にすっかり定着しています。なので、「そのような人が高萩にいたことは誇りです」と及川賢信さん（15）がやや自慢げに答えるのも当然です。

じつさい赤水さんは農民出身ながら学者に転じ、緯線と方角線が入った日本地図を初めて刊行するという大事業を成し遂げ、一気にブレークする人でした。

数え52歳に達した赤水さん、まず「改製日本分里図」を完成させます。

この地図がいわゆる赤

好奇心、学問究める

たゆまぬ努力 先駆者

長久保赤水「重文指定」

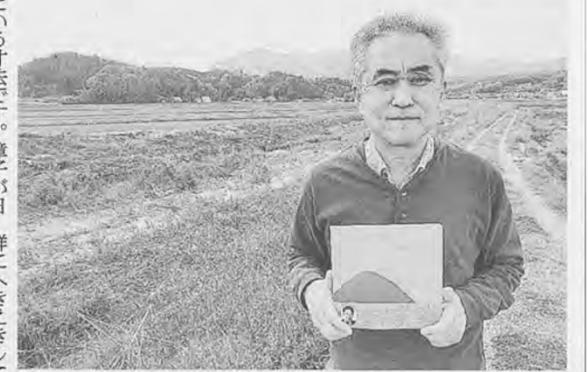
長久保赤水（1717〜1801年）は現在の高萩市赤浜の農家に生まれ、幼い頃から勉強好きだった。「讀書に夢中にならぬ、頼まれた家事を忘れてしまふことがあったらしい」。赤水の研究を長年続けてきた赤水顕彰会顧問の長久保源蔵さん（89）が語る。



漫画「長久保赤水の生涯」で、赤水が東北を旅した際の記録「東奥紀行」の内容を表したページ

お待たせしました。「赤水さん」は今週から再開します。話は常陸国赤浜村（現高萩市赤浜）の長久保赤水（1717〜1801）さんが数え35歳の頃、いよいよ地図作りに着手するところからです。通称「赤水図」と呼ばれる「改正日本輿地路程全図」の完成は63歳。実に約30年をかけた大仕事の始まりです。その姿は真面目一本だっただけです。一族の長久保片雲（本名・源蔵）さん（89）＝高萩市＝が語りまします。「とにかく謙虚実直なひとでした。一日の計は朝鳴に在り、一月の計は朝巨（一日）に在り」。赤水は、鶏の鳴く声と同時に起床せよ、なければ夕刻に後悔する、という言葉をいまいしめにしていました。自ら自宅前の街道を往來する旅人を呼び止めては土地の名前や街道を聞き、入門した名越南溪のつて（？）で彰考館秘蔵の諸藩発行の地図も模写。天文学の知識も身につけました。勉強に使った「天経或問」という中国の書物が残っています。ページの端には赤水さんの書き込み。地球とみられる円に「赤道」「緯度」「経度即東西」などと書いています。地図は、障子に描き込んでいました。タテヨコの格子を緯度経度に見立てた

好奇心むずむず 異人と「違法」交流



という寸法です。障子が日本地図に早変わり。さぞかし妻のお腹はア然としたに違ひありません。でも、単に想像で地図を描いたわけではありませぬ。実地検証もしています。44歳の夏、仲間7人で東北、新潟を旅します。彼は磁石を持参し、方位を調べているんです。福島県の「いわき市春らしの伝承郷」の夏井芳徳館長（60）が教えてくれました。「この旅では赤水の意外な一面が垣間見えます。茨城と福島の県境に近い、勿来の切り通しを抜けると、中は暗く、崖も崩れそうなので怖くなり急ぎ通り過ぎた」とか、「馬を見に行ったらハエとアブの大



自身が解説文を寄せた「龍燈」伝説の絵本「りゅうのひかり」（長久保赤水顕彰会刊）を持つ夏井芳徳さん。後方中央のところが天山が関ヶ原と福島の県境を示している。赤水の書き込み「高萩市歴史民俗資料館蔵」

群にへきえきした」とか、と悪くされます。28歳の頃は福島沖に出た川をさかのぼる不思議な光「龍燈」を見ようと、いわき市の関ヶ原（標高605m）に登ります。夜に登って実際に見て、翌日の昼にも、「屋に登ったのは発生原理を探ろうとしたようです。その好奇心、学究心たるや相当なものです」。51歳の時には長崎行きもチャンスを得ます。近村の漁師がベトナムまで漂流し、水戸藩の役人と迎えに行くのです（自ら志願したという説もあります）。鎖国時代でも、江戸幕府は長崎でオランダや清（中国）と交易していました。赤水さんの好奇心がむずむずします。外国人との交流

伝わってくる時がある。「この世の中はどのようにして成り立っているのか？」この問いへの答えを見つけるため、赤水は強い思いを持って、日々、真摯に学び、探究を続けた。学問に対する強い思いを持ち、日々、真摯に学び、探究すること。私はこれらのことも、赤水から、しっかりと学び取らなくてはならないと思っている。また、その一方で、赤水が書いた文章を読んでいると、そこにユーモアに満ちた面白味を感じることもある。そのような時、私は赤水という人間が持つ魅力に強く惹き込まれている自分がいることに気づかされる。

藩主に制度改善「直訴」も

もとは儒学を深く学んだが「好奇心で手を大げなうった結果、天文や地理が肌に合っていたのか」（源蔵さん）と、地図作成の道に進んだ。▽「農民疾苦」61歳の頃、赤水は水戸藩6代藩主徳川治保に学問を教える侍講に抜擢された。赤水を推挙した郡奉行、皆川教純



新しい伝記漫画の発行に向け作業する黒沢貴子さん＝高萩市内

は「いち農民学者が御殿に上るのは有史以来初めてのこと」と述べたという。赤水は政治にも明るかった。1778年、治保公に対して、「農民疾苦」という書を上程。年貢取り立ての運用がいかに農民を苦しめているか記し、改善すべき制度を具体的に列挙した内容だ。直訴などが禁じられていた時代で、処分を受ける可能性もあったが、最終的には改善に結びついたという。源蔵さんは「個人的な欲求で、農民の苦しみを取り払ってほしいと訴えた。頼ま

資料を読み込み、かみ砕いて漫画として表現する作業の中、赤水の人生は「ドラマチックで、成功のプロセスを踏んでいる」と感じた。11歳で父を亡くし、生きていくために「変わらざるを得なくなっただけ」の助けを得た。そうした出来事が赤水の力になったと想像する。漫画家を目指した時期があったが簡単な道ではなく、挫折を経験。赤水と自身を比べたとき「私は漫画を描きたいと思っても、誰かの役に立つと思ったことはなかった」。伝記漫画を読んだ人から「赤水のことがよく分かりました」と言われることで、役に立てたのだと感じられた。赤水との出会いが、自信と喜びにつながった。切り口を変えた漫画を来年新たに発行するため、再び構想を練っている。

赤水の手紙
（長男・藤八郎へ）
：續長久保赤水書簡集現代語訳から抜粋）
（前略）たくさん菊漬を食べて寿命を延ばそうと思っている（赤水は「地理志」成就のために長寿を願って菊漬を愛用した）。（略）学問のない者は百歳を経ても生きた甲斐はない。（略）だから君子（学識のある人格者）は生涯学問を怠らぬ人なのだ。それゆえ天の助けもあるのだ。私は自分自身に経験があるからこういうのだ。

知名度向上へ奔走

郷土の誇り

先駆者

長久保赤水(重文指定)

「赤水先生の業績をなんと 学相に答申。夏(ころ)までに指 定される。1992年に設立 された。赤水の功績を伝える活動 国(文化審議会)は3月19 日、長久保赤水の関係資料を 顕彰会の佐川春久会長(70 国)の重要文化財(重文)に指 定するよう萩生田光一文部科 喜ぶ。



「長久保赤水記念館」として活用する構想がある歴跡。高萩市赤坂

講演や銅像、陶板建立も



長久保赤水の功績を後世に伝えるため活動 を展開する佐川春久さん=JR高萩駅前

「すごいことをやったのに 赤水はあまり世に知られてい ない。非常にもったいない」 との思いを強く持つ。201 2年に会長に就任して以来、 赤水の知名度向上のためさま ざまな事業の実現に奔走し続 けてきた。

赤水一族の一部の子孫は今 も高萩市に暮らすほか、赤水 関連の史跡や施設が市内に点 在する。

赤水の墓は潮騒が聞こえる 海沿いの林の中に立つ。同会 員や市民有志による実行委 員会は2012年、JR高萩 駅前の広場に赤水の銅像と赤 水図の陶板を建立した。子孫 から「現在使っていない屋敷 を赤水のPRに活用してほしい

グ会、講演などやれることは 何でもやった。日本地図学会 との連携も進めている。

い」との打診があったため、 今後、市と調整しながら「赤 水記念館」として改修してい く構想もある。

▽地域資源に

赤水一族の一部の子孫は今 も高萩市に暮らすほか、赤水 関連の史跡や施設が市内に点 在する。

▽後世へ伝える

重文指定で「国民の財産に なった」(佐川会長)ことを 好機とし、同会は今後も積極 的に事業を展開していく。

赤水の手紙

(長男藤八郎、次男 四郎次、孫の作之丞 【藤八郎の長男】へ： 長久保赤水書簡集 現代語訳から抜粋)

(前略) 書を読むこと は、名人たちの口頭 での教えを受けるの と同じである。隙さ へあれば気を許さず 励むよう。書を買ひ 求める金銭を惜しん ではない。



現代語訳

4よき師よき友

江戸時代のベストセラ ーとなる日本地図「改正日本 輿地路程全図」(赤水図) を世に送り出すほどの大任 事をする人はやはり、よき 師、よき友に恵まれるんで すね。長久保赤水さん(1 717~1801)を見る とつくづくそう思います。

20代の赤水さんはまだ、 地図作りに目覚める前です。農作業の傍ら、常陸国 赤浜村(現高萩市赤坂)か ら下手綱村(現同市下手 綱)の医師鈴木玄淳の私塾 に通い、仲間と詩文、漢文 などに励みます。

返書には学問をこころざ す者の心構えが説いてあり ました。四書五経、漢書、 後漢書など中国の史書の熟 読をすすめ、「結局、学問 は心がけ次第。(修めるに は)人生の半分以上はかか る仕事です」と諭し、最後 に「書では言い尽くせませ んので、お会いしてお話し しましょう」と結ぶのです (長久保赤水頭彰会発行

「玄淳先生は渡辺 さんちの敷地内にあったと みられるんです。渡辺さん の先祖は、能筆で知られた まな弟子ですよ」

「赤水さんは数え23歳で、 またいとお前を妻にめ とります。25歳で長男、27 歳で次男が生まれ、学問も 家庭生活もますます充実し た時期なのです。赤水さんはいよいよ、地 図作りに踏み出します。(フリーライター・岡村晋) 原則木曜の掲載です

赤水さん 地図に広がる いきいき人生



恩師の名越南漢から「(学問 は)人生の半分以上はかかる 仕事」と手ほどきを受けた手 紙。高萩市歴史民俗資料館蔵

大学者から返事が来ちゃった



鈴木家の墓を管理する渡辺文昭さんと律子さん。大きい墓が玄淳、小さい墓は玄 淳の妻、阿清(おきよ)=高萩市下手綱

「玄淳先生は渡辺 さんちの敷地内にあったと みられるんです。渡辺さん の先祖は、能筆で知られた まな弟子ですよ」

「赤水さんは数え23歳で、 またいとお前を妻にめ とります。25歳で長男、27 歳で次男が生まれ、学問も 家庭生活もますます充実し た時期なのです。赤水さんはいよいよ、地 図作りに踏み出します。(フリーライター・岡村晋) 原則木曜の掲載です

赤水の手紙

(長男・藤八郎へ：長久保赤 水書簡集現代語訳から抜粋)

(前略) 殿様や大炊頭様(目白 公)、中山殿(治保の弟。水 戸藩附家老中山備前守信敬) などより時々政治についてこ 質問がある。私の考えをお用 いになられることもあり、即 ち天理にかなった事もあるの だろうと思う。これもまた当 然のことであり、大能の野駒(大 能村牧場の放し駒)の問題は 解決した。この上にも同じ ような事が出来れば本望で ある。例えば、子育ての事 (奨励金)。御蔵前での貢納す る事(蔵前でのモミ改めなど 問題があった)。大豆にかける 税金の事。贅沢を禁ずる事。 賭博に罰金を払わせる事。寺 社からの納入金を止める事。 町人から金を借りる事は、無 用の事。紙幣(藩札発行)は よろしくない事。いろいろな 税金はとらないようにする事。 右のことがらは皆、私のたて た政策である。これらの事に ついてみても、私が江戸に居 ることは天命と思っている。 だからこのまま江戸の土にな ろうとも天意(自然の道理) に任せようと思う。意見は無 用である。

赤水さん 地図に広がるいきいき人生

③きっかけ

数え14歳から通った常陸国下手綱村(現高萩市下手綱)の私塾でめきめきと才能を伸ばした長久保赤水さん(1717〜1801)は32歳の頃、奥州いわき(いまの福島県)の寺に招かれます。「論語古訓」の講義を頼まれるんです。

「この頃だと思っただすよね。途中で道に迷ったりして、地図の必要性を痛感したんじゃないかなあ」

江戸中期から明治にかけてベストセラーとなった日本地図「改正日本輿地路程全図」(通称赤水図)を63歳で作上げた赤水さん。一族の長久保片雲(本名・源蔵)さん(89)＝高萩市＝に「なぜ地図作りに目覚めたのでしょうか?」と尋ねたところ、返ってきた答えがこれでした。赤水さんは35歳の頃から、地図を書き始めたといわれています。

でも、赤水図を見ると本当に道に迷ったんじゃないかと思わされます。街道、河川、宿場、名所・旧跡などが詳細に書き込まれています。だから発売されるとたちまち評判となり、旅行

道迷い着想? サービス精神満載



に、ビジネスにと愛用されるんです。

その地図がなんと、石岡市の綿引正義さん(73)方に伝わっています。歴史の重みを感じます。でもなぜ綿引家にあるのでしょうか。

「5代前の政八郎のものではないかと想像しています。うちは私で28代目ですが、江戸時代末ごろまで松本屋という旅館を営んでいました。政八郎は信心深い人で、全国の神社仏閣に参拝するためによく旅行していたので、この地図を頼りに歩いていたら思っんです」

赤水図がベストセラーになった理由は、誰もが自由に購入できたという点にあるんです。

「(1745〜1818)の『伊能図(大日本沿海輿地全図)』とは大きく違います。忠敬は当初こそ自費で地図作製に取り組みますが、やがて幕府のお墨付きを得て、資金、人材、物資などの援助を受けて全国を測量します。そのため完成した地図は幕府所有の『マール秘』扱いでした。

綿引さんは語ります。「(赤水の)地図は折り畳み式でしたが劣化がひどくなったので、祖父が表具師に頼んで掛け軸にしたんです。骨董屋も売ってくれませんが、手放すつもりはないですね。家宝です」

精度の高さに加えて、折り畳み式である点も赤水図の画期的なところ。「ハンディタイプ」なのです。

赤水さんって頑固な面もあったようですが、地図を買ってもらうためにはあれこれ工夫する。初版をパージョンアップさせた2版では浅間山や阿蘇山に煙を立ち上らせ、那智の滝も描き入れたんですよ。サービス精神が旺盛で、着想もユニークなエンターテイナーだったと思っんですね。

次回は再び、地図作りに目覚める前の20代の赤水さんに話を戻します。

＝フリーライター・岡村青

＝原則木曜の掲載です

①綿引正義さん方に伝わる「赤水図」
②「赤水図」を所有する綿引さん。見ているのはレプリカ＝いずれも石岡市

赤水の手紙

(長男・藤八郎へ)
…續長久保赤水書簡集現代語訳から抜粋)

(前略) 殿様は年貢の上がりが悪く手元不如意(意の如くならず経済的に苦しいこと。思い通りにならないこと)のためお借り上げ(藩が一般から金を先借りすること)という新法を定められた。でもこれは一時的なこと、たかだか三年か五年の内に元のようになされるであろう。(略) 当節のお借り上げなどは予定外の事である。これらの事は赤水が政策をさし上げたのでこのようになった(こ政府なのである。将来うまくいくように愚案したものである)。

この地図 作ったのだあれ?

↑R 高萩駅前にも長久保赤水の像―茨城県高萩市



一八二二年に完成した伊能忠敬の地図は、伊能自らが実際に各地を歩き歩幅で測量したことで有名。一方で赤水は、自分で集めた地名などの情報を地図に盛り込んだため、内陸の情報も豊富だ。長久保赤水顕彰会の佐川春久会長(右)は「友人が多く、旅人にもお茶をこまめに話をして聞きながら情報収集能力にたけていた」と強調する。

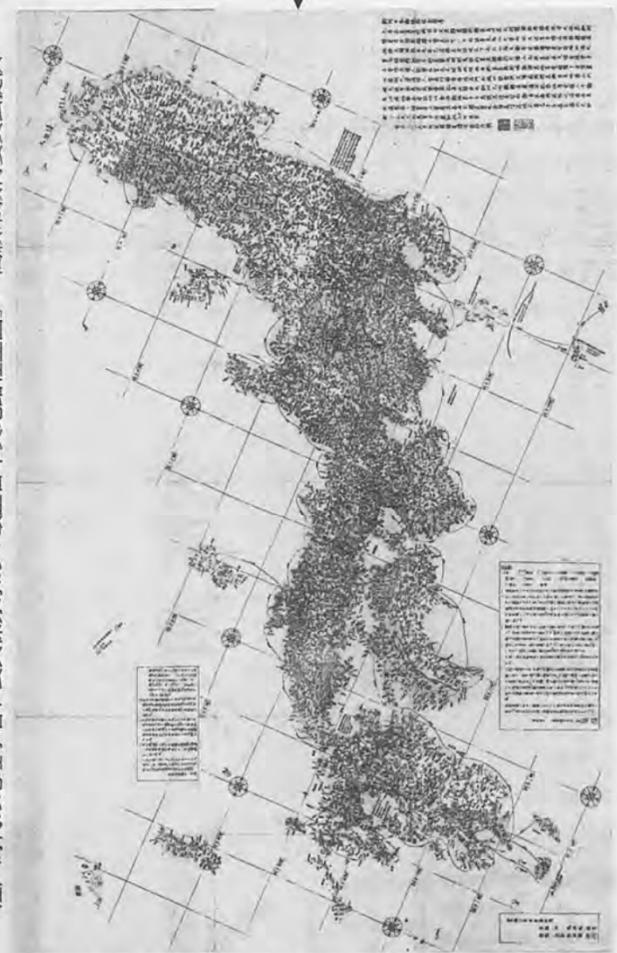
赤水の関連資料六百九十三点は、二〇一七年に県指定有形文化財になるなど徐々に価値を評価され、国の文化審議会は今年三月、同資料を国の重要文化財に指定するよう文部科学相に申請した。

地元顕彰会がPR

さらに知名度を上げようと顕彰会は同月、赤水が地図に書き残した不思議な海上現象を元にした絵本「ゆづりのひかり」を出版。縦約八十四センチ、横約百二十八センチの赤水図のレプリカ発行を目指し、資金三百万円をクラウドファンディングで募る。

動きは県外にも広がり、今後、吉田松陰ゆかりの松陰神社(山口県萩市)でもレプリカが展示される見通しだ。佐川さんは「世界で通用する、誇れる先人の一人。地理の歴史の中に赤水図をしっかりと位置付けたい」と語り、将来的には大河ドラマ化も目指している。

長久保赤水 知名度じわり



茨城県高萩市出身で江戸時代の地理学者、長久保赤水(一七一一〜一八〇二年)が近年、知名度を上げている。初めて実測で日本地図を作った伊能忠敬より四十二年早く、情報収集による精度の高い「赤水図」を作り、庶民や後世の知識人に広めた功績が評価され始めた。

伊能より42年早く

赤水は高萩市赤旗の農家生まれで、幼い頃に両親を亡くした。親族に育てられながら、学問に興味を持ち、水戸藩の学者らの下で儒学や天文学、地理学を学んだ。三十年代半ばごろ正確な日本地図を作ろうと決意し、情報収集や各地の旅を経て、五十二歳で初めての地図を完成。功績が認められ水戸藩主の侍講になった。

赤水の地図は天文学を取り入れたことで、日本で初めて経線と緯線が書かれ、比較的正確なのが特徴。中でも一七七九年に初版が完成した「改正日本輿地路程全図」(通称・赤水図)は、実用性が高く、江戸時代の庶民に広く流通した。

幕末の志士を育んだ吉田松陰(一八二〇〜五九年)が兄に宛てた手紙には「これが無くては不自由」と、赤水図を旅に役立つとしていたことが記されている。

